

Ann. Rep. Asahikawa
Med. Coll.
1979, Vol. 1, 1 ~ 13

確実性の問題

——〈知〉と〈信〉とに関するウイトゲンシュタインの省察——

岡 田 雅 勝

1

小論は〈確実性〉の問題を〈知〉および〈信〉をめぐる問題として取り扱い、その論点を述べようとするものである。^{〔註1〕}

〈確実性〉の問題はまずもってソリプシズム Solipsismus の問題に触れてくるようにおもわれる。というのも、ソリプシズムの主張は、〈私は私の世界であり、私のみが存在する。自分の心にあると自分だけが意識するものに知の源泉、確実性の根拠がある〉^{〔註2〕}ということにあるからである。ウイトゲンシュタインは、『論理哲学論考』においてつぎのように述べている。「ソリプシズムが考えていることは全く正しい。ただそれは自分自身を語ることはできず、自身を示すだけである」^{〔註3〕}。ソリプシズムをわたしたちは正当化しえない。ただ正しいとしか言いようがない。それ以上についてわたしたちは沈黙に身を委ねる以外にないというのがウイトゲンシュタインの主張である。

わたしたちはソリプシズムの正当性を擁護しえない。それゆえに、〈私的言語〉の存在も認めるわけにはいかない。わたしたちは〈私だけの世界〉^{〔註4〕}に生きるのではない。わたしたちは間柄の存在であり、社会的存在である。わたしたちの〈知〉も〈信〉もわたしたちが生きる世界全体に根差しているといえよう。わたしたちは実際生活において諸々の言語ゲームを営み、お互いに意思疏通し、知に知を重ねている^{〔註5〕}。こうしたわたしたちの知の営みの事実性は一体どこに根拠をおいているのであろうか。あるものを確実だとするわたしたちの確信はどこから来るのであろうか。

ところで、G・E・ムーアは〈私が確実に知っている幾つかの命題が存在する〉と主張し、その論証を展開している。ムーアがその論証に引き合いに出した命題はたとえばつぎのようなものである。〈これが手であることを私は知っている〉、〈自分が月に行ったことがないのを私は知っている〉、〈自分の誕生のはるか昔から大地が存在したのを私は知っている〉等々。ムーアは懐疑論を論駁し、常識擁護の立場から〈私が確実に

知っている>論命題が存在することを論証しようとしたのであった。^(註6)

ムーアのこの問題提起にウィトゲンシュタインは強い関心を寄せたのであった。ムーアの命題は<私は知っている>、<私は確実に知っている>という形で表現されているものであるが、これはソリプシストからの発言ではない。この命題に関してウィトゲンシュタインはつぎのように言う。<ムーアが知っていると主張する真理は、かれが知っていると言うなら、わたしたちも皆知っていると言って差支えないものである>。ところで、どうしてかれはムーアが<知っている>と主張する命題を皆知っている命題として承認するのであろうか。「ムーアが<知っている>ことを述べる命題は全てその反対を信ずる理由を想い浮べることが難しいものである」(G, 93)^(註7)とウィトゲンシュタインは述べ、<知っている>ことを述べる命題を承認するひとつの基準として、その反対のことを想定する理由のないことをあげている。たとえば、前述の<大地が存在した云々ということを知っている>という命題をとりあげてみるなら、文献によるのであれ、そのほかのものによるのであれ、私のえた情報は全てその命題を確信させるのであり、私の世界像にはその反対のことを信じさせるものはない。この限り、ムーアが知っているという命題をわたしたちも皆知っている>命題として受けて差支えないものなのである。

ところで、ここでの<私の世界像 Mein Weltbild>は決してソリプシストの言う<私の世界>という意味と同じような意味において用いられているのではない。ここでの<私の……>という意味は、私の<思い>によって構築された私の世界といったものではない。私の世界像は私がこの世に生誕して以来、<両親に、教師に、あるいはまわりの世界に、そのほかさまざまなものにより経験を積み重ねて>、いわば伝統として受け継いだものを背景としてつくりあげられたものである。こうした世界像を背景とし、<私は知っている>、<私はPであることを知っている>が発せられているのである。したがって、<私はPであることを知っている>と語る私はソリプシズムの世界で語る私ではない。この私は常識の世界あるいは公共的世界のひとりとして、他人とさまざまな言語ゲームをしている私なのである。それゆえ、Pで語られる事柄について私は私と公共的世界を共にするひとたちと相互に意思疎通をしている私なのである。

しかし、私は公共的世界においてほかのひとたちと同様な言葉の体制、意思疎通の体制を有しているとしても、私の諸々の行為には他人にとってかわりえないプライバシーがつきまといっていることはいうまでもない。^(註8)わたしたちの知の営みは公共的であるがゆえに、プライバシーはそこでは身を潜めている。そしてわたしたちは<検証の体系>において、<知>の行使をおこなう。だが、わたしたちの<知>が<検証の体系>におかれるのは、わたしたちの知が可謬的であることを前提としているからであろう。それにまた知の行使にさいしてわたしたちはどの情報に対しても検証により確証をしている

わけでもない。検証はどこかで終る。また、確証なしにも、〈誤りえない〉ものがあるのではないだろうか。〈人間はある状況において決して誤りえない〉(G, 155), とウィトゲンシュタインは述べる。この誤りえないものは、〈知〉の対象でないとするなら、〈信〉の対象なのであろうか。この誤りえないものがプライバシーに触れる。たとえば、〈私の痛み〉がそうである。私は自分の痛みについて誤りえない。これは〈知〉の対象ではない。しかし、〈信〉の対象といえるのであろうか。ともあれ、〈知〉の問題は〈知〉のみのことで済されることなのではなく、どこかでその基礎になっているものにぶつかる。それが〈私〉の問題にかかわるし、〈信〉の問題に究極にかかわってくるといえよう。それゆえに、また私のプライバシーに、そして私の信念にかかわってくるといえよう。だが、これらの問題はソリプシズムの世界に基礎づけられるのではなく、公共的世界において基礎づけられるのでなければならない。ウィトゲンシュタインが『論理哲学論考』で述べた、〈ソリプシズムの考えることは正しい。ただ自らを語ることができない〉という主張は、かれの最後の省察であった“確実性について”においても、そのままにされているようである。ここでの主題は〈言語ゲーム〉にあるようである。ウィトゲンシュタインが省察する〈知〉と〈信〉をめぐる〈確実性の問題〉は、まさしくわたしたちの言語ゲームが行なわれるための基礎を論じているようにおもわれるのである。

[註1] この小論はウィトゲンシュタインの最後の省察ノート（かれの死の2日まえまで書かれている）に基づいて、G. E. M. Anscombe および G. H. von Wright が編集して *Über Gewißheit* とタイトルがつけられた作品をめぐる知および信に関する考察である。ウィトゲンシュタインはかれの教え子ノーマン・マルコム の刺戟を受け、G. E. ムーアの論文に興味をあらためてかき立てられた。ムーアの主張は〈私が確実に知っている命題があるということであった。ウィトゲンシュタインはムーアの主張に関心を示し、それを称賛したといわれる。このノートにはウィトゲンシュタインのあくことなき思索がつづられている。なお、ウィトゲンシュタインの *Über Gewißheit* の使用にさして Bibliothek Suhrkamp 版を用いた。また G. E. ムーアの論文とは、*A Defence of Common Sense* および *Proof of an External World* のことを目指す。それらは *Philosophical Papers* (George Allen and Unwin Ltd. 1959) に収められている。

[註2] 拙論、「ソリプシズムとコトバ」(北海道哲学会会報1978) 参照のこと。

[註3] *Tractatus Logico-Philosophicus* (with an English translation by D. F. Pears & B. F. McGuinness, Routledge & Kegan Paul, 1922, 1933,) paragraph 5.62

[註4] 私的言語問題について、ウィトゲンシュタインはかれの後期の作品である『哲学研究』で詳細な論述をおこない、私的言語の存在をウィトゲンシュタインの主張は solipist の主張の正しさを肯定しながら solipist の言語を認めようとしないう所にある。solipsist はわたしたちと交信のてだてをもたないというところである。なお、かれの著、*Philosophische Untersuchungen* (Edited by G. E. M. Anscombe & R. Rhees, Basil Blackwell, 1953, 1967) を参照のこと。

[註5] 言語ゲーム Sprachspiel は『哲学探究』の中心テーマのひとつであるが、『確実性の問題』においても、直接のテーマとなっていないが、言語ゲームはその議論の根底となっているようにおもわれる。

[註6] G. E. Moore, *Philosophical Papers*. PP. 32-59. PP. 155-150

[註7] L. Wittgenstein, *Über Gewißheit*. からの引用は全て略記を用いた。例 (G, 93) は *Über Gewißheit* からの引用で、そのパラグラフ・ナンバー93を表す。

[註8] 公共性およびプライバシーの用語に関しては、A. J. Ayer, *The Central Questions of Phil-*

sophy, Weidenfeld and Nicolson, 1973 参照のこと。

2

〈確實性〉について考察をするにあたって、〈知〉の問題から論じるとしよう。^[註1]

経験論的な発想に従えば、〈知〉はわたしたちの感覚に求められる。感覚とは純粹な経験的所与であり、それゆえに全く誤りえないものである。ところで、感覚のこの直接的所与は知といえるものなのであろうか。たとえば、ラッセルに従うなら、知は〈直接体験による知 knowledge by acquaintance〉と〈記述による知 knowledge by description〉^[註2]とに分けられる。ラッセルによると感覚の直接所与は直接知に入るのであり、この所与は一切の経験的所与を前提とせず、逆に一切の経験的知の究極の拠り所となるものである。しかし、この知は記述されなければならない。記述されるところの所与は間接的となり、純粹な所与ではなくなるゆえに無謬的とはならない。といっても、感覚的所与が経験的知の拠り所であるとしても、それは記述されない限り、知とはいえないのではないだろうか。ところで、この所与は前言語的な形の所与である。^[註3]それが知であるためには、この所与はわたしたちの言語の規則に従って記述されるのでなければならないであろう。〈ある感覚の所与が命題の形で述べられる〉ことによって始めて知が成立すると言えよう。したがって経験的知の基礎とされるのは感覚所与を記述する命題ということになる。したがって、わたしたちはラッセルの言うように感覚を知として受けとることができないであろう。

さらに、ここで〈痛み〉の感覚をとりあげてみるとしよう。^[註4]私の〈痛み〉の感覚は、それが何の痛みであれ、私の感覚の直接的所与であり、疑いなく私の痛みである。さて、私は自分の痛みにさいして〔たとえば頭痛としよう〕、〈ああ、痛い、頭が痛い〉^[註5]とも言ったとしよう。この発言ははたして〈痛み〉の記述なのだろうか。もし記述であるとする、〈ああ、痛い、頭が痛い〉という表現で一体何が記述されているのであろうか。この表現には〈痛み〉そのものが記述されているとは言えない。これは記述命題ではない。これは私の痛みの振舞いなのである。ウィトゲンシュタインはつぎのように言う。「〈痛み〉の言葉による表現は泣くことの代りをするのであって、それを記述するのではない」(P. U, 1・244)。感覚を表わす言葉は、その感覚の自然な表現である行動の代りに用いられるのである。その言葉はそうした振舞い Benehmen のひとつなのである。ひとは自分の痛みについて誤りえないであろう、〈痛み〉の振舞いはまさに誤りえない自己の感覚の自然の表出なのである。感覚の無謬の純粹所与をわたしたちは〈訂正不能なもの incorrigible〉^[註6]と呼ぶとしよう。

私は自分の痛みについて誤りえない。したがって、〈私は自分が痛みを感じているか

どうかは知らない」という表現は妥当ではないであろう。〈私は自分が痛みを感じているのを知っている〉という表現に関してはどうであろうか。「自分について、私は痛みを感じているのを知っているとは誰も言えない」(P. U, 1・246), とウィトゲンシュタインは言う。無論, 〈私は自分が痛みを感じているのを知っている〉とは言えないこともない。しかし, それは〈私が痛みを感じている〉ということ以外の何も意味しない。私は端的に痛みを感じているのであり, そのことについて私は決して誤りえないのである。〈私は知っている〉という言葉は私の痛みに関しては適切な表現ではない。〈私は痛みを感じている〉という表現のその背後には〈訂正不可能性〉という論点が隠されていると言える。それは知の対象ではない。ちなみに, 〈かれが痛みを感じていることを私は知っている〉という表現は有意味である。というのも, これはかれの痛みの振舞いに関する私の知を表明している文章であるからである。つまり, この表現は知の対象を取り扱っているのである。以上のようにして, わたしたちは〈痛み〉という言葉をめぐる, それが自然の振舞いの代りをしている場合と〈痛み〉の記述の表現である場合があることを指摘してきた。前者は無謬であるが, 知の対象ではない。後者は知の対象であるが, 記述的であるがゆえに可謬的なのである。^[註7]ここで, わたしたちは新たに〈知 Wissen〉とは何かを問わなければならないのである。

[註1] 確実性に関する, ウィトゲンシュタインの省察は前述したようにノーマン・マルコム¹⁾の刺戟によるが, その辺の様子についてマルコムの回想記がある。Norman Malcolm, *Ludwig Wittgenstein: A Memoir*, Oxford Univ. Press, 1958 (邦訳藤本隆志訳, 『回想のウィトゲンシュタイン』法政大出版, 1974)。また, マルコムは自らムーアの議論に対して〈I know〉の用法についての反論を展開している。ウィトゲンシュタインの思索はマルコムとの議論のやりとりの中でなされている。マルコムはのちほど *Mind* 誌 (1952年) に自分の立場から論文を書く, それが *Knowledge and Belief* で, *Knowledge and Certainty* (Prentice-Hall, 1963) に収められている。また G. E. Moore 生誕百年を記念した講演としたものをまとめて, *Moore and Wittgenstein on the Sense of "I know"* という論文をかれの著 *Thought and Knowledge*, Cornell Univ. Press, 1977 に収めている。

Elizabeth Hankins Wolgast, *Paradoxes of Knowledge*, Cornell Univ. Press, 1977 においては, Wolgast は Moore の提出した命題を Descartes や Hume に遡り吟味し, Knowledge と Belief をめぐる問題点を明らかにしており, Moore の Common Sense Belief を評価している。

[註2] Bertrand Russell, *The Problems of Philosophy* (Oxford Univ. Press, 1912), P. 58。

[註3] Bertrand Russell, *An Inquiry into Meaning and Truth* (George Allen & Unwin, 1940), PP. 44-50. Russell は *The Problems of Philosophy* では knowledge by acquaintance を直接知として語り, それを経験的知の基礎と認めているが, ここでは acquaintance を知の preverbal knowledge とみなしていることを述べておきたい。

[註4] 痛みについてはウィトゲンシュタインの『哲学探究』を参照。

[註5] (P. U. 1・244) は Wittgenstein, *Philosophische Untersuchungen* の1部244パラグラフの略である。以下同書から引用は (P. U) とする。

[註6] "incorrigible" は Norman Malcolm, *Wittgenstein's Philosophical Investigations* より借用した。この論文は Harold Morick (ed.), *Wittgenstein and the Problem of Other Minds* (McGraw-Hill, 1967) に含まれている。P60参照。

〔註7〕 経験のプライバシーの問題は Russell の *The Analysis of Mind* や Ayer の *Language, Truth and Logic* あるいは *The Central Questions of Philosophy* において論ぜられている。かれらの議論をふまえて Norman Malcolm は *The Privacy of Experience* という論文（それはかれの著 *Thought and Knowledge* に含まれている）において、*the privacy of ownership* と *the privacy of observability* とに分けて *privacy* の論議を展開している。

3

「知というこの奇妙な現象は何か」(P. U, 1. 363), ウィトゲンシュタインは問う。〈知っている *wissen*〉というのは意識の状態なのであろうか。たとえば, ABCを知っていることはある種の心の状態であると言うとき, ひとは心の装置(頭脳)のことを想定して, それを介してこの知が外的に表出されると考える(P. U, 1.149)。はたしてそうなのであろうか。わたしたちは悲しみとか苦痛とか興奮を心の状態であると言う。しかし, 〈知っている〉というのはこうした心の状態とは違っている。悲しみ等は痛みと同様知ではない。自分の心の状態を表現する言葉を用いる際, わたしたちは〈私は知っている〉という言葉を用いないのである。さらに, その言葉を用いない例としてウィトゲンシュタインはつぎのものをあげる。「〈私は君の考えていることを知っている〉というのは正しいが, 〈私は自分の考えていることを知っている〉というのは誤りである」(P. U, S222)。

知を心の状態であり, それゆえ内的過程だと想定してみるとしよう。それに〈私はこれはPであることを知っている〉というのが心の状態であり, それゆえに内的過程のことであるとすれば, 私は自分の心を反省さえすればこの命題の正しさを確かめることができるのである。しかし実際問題として, この命題で語られていることを自分の心においていくら反省したとしても, それはただ自分の以前の発言を確認したにすぎないであろう。私は〈私は知っている〉ということを確認する基準を自分のうちにもちえず, ただ同じことを繰り返すだけにすぎない。〈私はこれがPであることを知っている〉という私の主張が妥当性をもつのは, 〈これがPである〉という私の発言に間違いがない場合である。これが実際にPでなければ, 私の〈私は……を知っている〉という発言は誤ったことになる。「私の〈私は……を知っている〉という発言は〈知識〉を証拠立てる別の事実と結びついているときのみ有意味である」(G, 432)。私の〈知〉は一般的に言われるように心の状態だと言っても何も語ったことにはならない。私は自分の知を知だと同定する基準を自分の内部においてもちえないのである。ウィトゲンシュタインの言うように, 「〈内的な出来事〉は外的基準を必要とする」(P. U, 1. 581)。ある知がある知として同定されるのは, 外的基準ではかり, 其の検閲を要するときである。^{〔註1〕}

わたしたちが〈S〉について, 〈私はSを知っている〉と言うとき, 無論, それが発せられる状況, 演じられる言語ゲームによって異ってくるが, Sがたとえばある特定の

ひとのことを指す場合のことを考えてみるとしよう。その場合、〈私はSを知っている〉という表現は、たとえばSに会ったことがあるとか、Sと一緒に何かをしたことがあるとか等々の体験を通して、Sに関する情報〔Sの身体的特徴、Sの経歴、Sのひととなり等〕をえており、その情報に関して、真偽を問われればいつでも証拠を提出することができるという確信がある場合であろう。この例は、わたしたちが〈知っている〉という表現をするときには、わたしたちは自分が知っていると言うものについて何らかの証拠をもちうることを前提としているのだ、ということを示唆する。ウィトゲンシュタインはつぎのように言う。「私があることを知[・]っ[・]て[・]い[・]る[・]の[・]か[・]ど[・]う[・]か[・]は[・]私[・]の[・]主[・]張[・]が[・]証[・]拠[・]に[・]よ[・]っ[・]て[・]是[・]と[・]さ[・]れ[・]る[・]か[・]、それとも非とされるかにかかっている」(G, 504)。

ウィトゲンシュタインはこのように断言しておきながらまたつぎのようにも述べている。「〈私は知っている〉というのは、知られた事柄がまさしく事実である、と保証するようなある事態を記述しているように見える」(G, 12)。ここで〈……のように見える scheinen〉という表現が加わっていることに注目してみたい。〈私はSを知っている〉という発言はいま述べたように、〈それを保証する客観的な証拠に基づいて〉発せられたものである。といっても、〈私の知〉が必ずしも客観的な証拠をえるということは保証のかぎりではない。私にはただそのように見える scheinen ということになりかねないのである。〈私の知〉には〈思いなし〉という主観的な判断がつきまとうことは否めない。〈私は知っている〉という表現には、〈私は知っていると思った〉という表現が隠されているのをわたしたちは見逃しがちである (G, 12)。私がたとえば〈Pであることを知っている〉と発言し、〈Pであること〉が確証されるのでなければ、私の〈知っている〉という発言は実は自分が〈知っていると思っていただけだった〉ということになる可能性をもった表現なのである。つまり、〈知っている〉ということは私の内的な出来事であるなどと言って済されるようなものではない。

それは外的基準を必要とするのであり、それゆえ知られた事柄がまさしく事実であることを保証する事態を私が記述することによりなりたっているものである。ラッセルのいう〈記述による知〉がここでは〈知っている〉ということにあてはまるようである。そしてラッセルの〈記述による知〉が可謬的な要素を含むのであったように、〈知っている〉ということにも、〈知っていると思っていた〉、実の所〈知っていない〉という反対の表現が隠されているのである。〈知っている〉ということは〈私の内部の省察〉によって確認されるようなものではない、外的基準によりはからなければならないことである。〈知〉とは〈記述による知〉である。それは観察とか振舞い等の記述によりなりたち、外的基準のチェックを要するものである。そして〈私は知っている〉という表現はこの外的基準をめぐった、私の判断を表明するものである。それだからこそ、〈私は知っている〉という言明には、私の〈思いなし〉がつきまとう。〈知っていなかった〉あ

るいは〈知らない〉と言いうる可能性がこの言明には隠されているのである。しかしながら、私の〈思いなし〉がそれだとしてはっきりするのは、私が自分の内部で自分の立てた基準に照らすことによるのではない。その意味で〈知っている〉ということは心の状態ではないのである。わたしたちは公共的な基準に照らして、自分の〈思いなし〉を認めるのである。〈知〉とは、まさしくこうした公共性に基礎づけられているものである。

〔註1〕 P.U, 1.354に Kriterium と Symptome の区別がある。また、Wittgenstein, *The Blue Book* (Basil Blackwell, 1969) PP. 24-25 で両者の区別に触れているのに依ると、前者は、たとえば Angina を例にとると、〈しかじかのバクテリアを患者の血液に見出した〉ということで、後者は〈患者の喉が炎症をおこしている〉というのがそれだと区別している。

4

G. E. ムーアが〈私は知っている〉として提出する命題は前章で示した基準、つまりその反対のことがあるとは想定しえないほど自明な命題なのである。それはわたしたちが〈思いなし〉であるとかあるいは〈知っていると思っていた〉というようなことになりえない命題なのである。

ムーアは〈私は知っている〉ものとして、〈ここに手がある〉、〈これは木である〉、〈大地は私の誕生の遥か以前から存在していた〉、〈私は人間である〉、〈私は月に行ったことがない〉等々の命題を挙げている。これらの命題はどれもが確実に知られるものであり、それゆえに間違ええないものである、というのがムーアの主張である。たとえば、自分の手を前に出し、〈ここに手があるのを私は知っている〉という自分の言明に関して、私は決して間違えることはない、とムーアは主張するのである。〈どうしてなのか〉という疑問に関して、その答えは〈私がみているのはまさに私の手なのであるからだ〉(G, 19) ということであつてしまうことである。これ以上の理由付けを示そうにも示しようがない。〈ここに手がある〉というのは、この場合〈疑いの余地がない〉ことなのである。それを〈私は知らない〉というのは無意味である。つぎに、同じくムーアの〈自分が月に行ったことのないのを私は知っている〉という命題をとりあげてみるとしよう。これに関して、ウィットゲンシュタインはムーアを擁護してつぎのように述べている。この命題は私にとって全く確実なので、私はそれ以上の論拠を示しえない (G, 111)。したがって、私はこの命題を疑いえない (G, 117)。この命題の反対のことを、つまり〈私は月に行ったことがあるかもしれない〉ということ想定したとしても、この想定によって何も説明されるわけでもない。それゆえ、この想定は無意味である。〈その想定を証拠立てるものは何ひとつなく、全てがその反証となる〉 (G, 117) からである。^(註1)

つぎに、もうひとつのムーアの命題、＜大地は私の誕生の遥か以前から存在していたことを私は知っている＞をとりあげるとしよう。さて、この命題に関して、わたしたちが証拠とみなすものも、私の誕生の遥か以前から大地が存在していたことを示している。反対の仮説を擁護するような証拠はひとつとしてない（G, 202）。たとえば、歴史的証拠にあたるでしょう。どの歴史的証拠もそれを確認する証拠となっている。それでも、大地が私の誕生以前から存在していることを疑い、そしてその命題が真ではないとするものがあると仮定してみるとしよう。その場合、かれは一体何に自分の主張の根拠をおいているのであろうか。そもそもかれの主張は提出されたどの証拠も信頼することができないという前提に基づいている。その限り、かれの主張は最初からどんな意味においても、正当化されるわけにはいかない。わたしたちはどんな証拠をも確実なものとみなさないような言語の存在など信頼することができない。もし仮にでもわたしたちがかれの正しさを認めるようなことをするとするなら、わたしたちは自ら自分たちの拠り所である証拠の体系そのものを覆してしまうであろう。わたしたちの言語ゲームはわたしたちに共通の証拠の体系内においてなされる。それゆえそれが覆されれば、わたしたちはかれと言語ゲームをできるような共通の場をもたない。

ところで、わたしたちのもちえた全ての証拠がある特定の言明を支持し、その反証となるものを見出しえないとき、その言明を無条件に妥当的であるとみなしてもいいのであろうか。わたしたちはこの場合、もちえた証拠のどれもがその言明を支持するのなら、それを真だとするのであって、偽などと言うわけにはいかない。しかし、それならそれが真だとすれば、その証拠が正しいといえるその根拠を示せと誰かに言われたらどうしたらいいのであろうか。そのとき、わたしたちは一瞬たじろぎ、真なのは、全てがそれを証拠立て、その反証がないからだと答えるぐらいであろう。こう言っても、わたしたちは根拠を示したわけではない。わたしたちはそこで行詰まってしまうのである。証拠を基礎づけ、正当化する営みはどこかで終るのである（G, 204）。わたしたちは証拠の根拠を証拠立てるわけにはいかない。したがって、ある言明を＜真＞だとしたり、＜偽＞だとするのは、証拠の確認または反証を基準とすれば済むことである。その証拠の根拠まで遡る必要はない。「真理に根拠があるとすれば、その根拠は真でも偽でもない」（G, 205）とウィトゲンシュタインは述べている。つまり、その証拠の根拠はどういうものなのか（真とか偽とかにかかわりがない）はその際の論点ではないというのである（G, 201）。わたしたちの言語ゲームはその基礎の証拠立てにまでかかわりをもちえない。

ムーアが＜私は知っている＞として挙げるどの命題も＜その反対のことを信じる理由を想定するのが困難な命題である＞（G, 93）。それゆえ、ムーアが知っていると言主張する真理は＜かれがそれを知っているなら、わたしたちも皆知っていると言って差支えないような真理なのである＞（G, 100）。また、ムーアは＜私は知っている＞と言うかわ

りに、〈私には……は確かである Es steht für mich fest, daß……〉あるいはさらに〈私にも、ほかのひとたちにも……は確かである Es steht für mich und viele andre fest, daß……〉とも言ってよかったのではないか (G, 116), ということである。いな、むしろつぎのように言った方がいい。「自分が知っている」と述べることをムーアは実は知っていないのだ (G, 151)。かれの述べていることは〈確かな〉ことであり、〈間違えない〉ことなのである。ムーアは〈私は知っている〉という命題を挙げることによって、かれは〈誤りえない〉命題が存在するというかれの確信を述べている。この点に関して、わたしたちもかれの正しさを認め、それを確信しているというかれの言葉を信じていいであろう。

しかし、ムーアは〈私はPであることを知っている〉という命題を挙げる時、〈知っている〉という言葉で誤用したのである。このウィトゲンシュタインの指摘はきわめて重要である。というのも、ムーアは「この命題を〈私は痛みを感じている〉と同じような疑いの余地のない表白として考察した」(G, 178) からなのである。つまり、ムーアがそれらの命題で語っているのは、ムーアが〈知っている〉ことではない、〈信じて疑わない〉ことなのである。^[註2] わたしたちは〈知っている〉というとき、実は〈知っていると思っただけなのだ〉という事態になりうるものについてその言葉を用いるようにしてきたのであった。ムーアの挙げる命題が〈知っていると思っただけなのだ〉というようなことを意味することになるなら、わたしたちの意思疎通の体制、共通な理解の体制あるいは言語ゲームといったものはまったくその基盤を失ってしまうであろう。

【註1】ウィトゲンシュタインがムーアのこの命題について思索をめぐらしたのは1949年から1950年頃だと編者のアンスコムは述べている。この命題が真となる根拠は人類はいまだかつて月に行ったものがないという全称命題から導びかれている。G, 171を参照のこと。

【註2】〈信じる〉というのは、ウィトゲンシュタインにとってひとつの心の状態なのである。『哲学探究』第二部Xを参照、かれはそこでムーアのパラドックスにふれている。またウィトゲンシュタインの〈信〉について、Norman Malcolmの論文 *The Groundlessness of Belief* がある(前述の *Thought and Knowledge* に収められている)。

5

ムーアが〈知っている〉として挙げる命題はその基盤となっているものを語っているようにおもわれる。わたしたちが〈私は知っている〉という表現で語るとき、その意味を〈確信している〉、〈習ったことがある〉、〈見たことがある〉、〈できる〉等さまざまに用いている。ムーアが〈知っている〉というのはかれの確信を表明しているのであり、それゆえ、かれの信念を表明しているようである。ウィトゲンシュタインは言う、〈私が知っていることはまた私の信じていることでもある〉(G, 177)。

ところで、〈信じる Glauben〉というのは一体どういうことか。^[註1]「〈私は信じる Ich glaube〉は主観的な真理性をもつ、しかし〈私は知っている Ich weiß〉はそうではない、というのは正しいことなのであろう」(G, 179)。たとえば、〈私はSを知っている〉という言葉には正当性があるが、しかし〈私は信じる〉という言葉には正当性がないというのが一般的な了解であらう(G, 175)。それと言うのも、〈私は知っている〉とわたしたちが言うのは、動かない証拠を提出する用意のあるときである。それゆえ、〈私は知っている〉という表現は真理証明の可能性 eine Möglichkeit des Dartums der Wahrheit と結びついている(G, 243)。〈私は知っている〉という表現には、私の思いなしが含まれているとしても、主観的な確信を表現する言葉ではない。外的基準によって客観的な保証を要することを基礎としている、私の判断なのである。

それに対して、〈私は信じる Ich glaube〉はまさしく私の主観的な信念、確信を意味する表現である。しかし、すでに述べたように、〈私の知っていることはまた私の信じていることでもある〉(G, 177)のである。〈S〉について、〈君はSを知っているのか、信じているだけなのか〉と問われたとき、〈私はSを知っており、また信じている〉と答える場合があらう。しかし、〈知っているとか、信じているとかの問題ではない。私はSを決して疑わない〉と答える場合もあらう。たとえば、自分の名前について、〈君は自分の名前を知っているのか、信じているだけなのか〉と問われた場合、どう答えるのであろうか。自分の名前について知っているのだとはノーマルな状況では答えないであろうし、また信じているのだとも答えないであろう。私は自分の名前についていささかも疑わない。もしそれが疑われるなら、私にとって確実な判断などは何ひとつ存在しないことになる(G, 490)であらう。私において〈知っている〉ことと〈信じている〉ことが重なり合っているとき、それは〈確信〉であり、〈疑いえないもの〉なのである。

わたしたちは〈疑いえないもの〉を根拠にして行為せざるをえない。「全てを疑おうとするものは疑うところまで行かないであらう。疑いのゲームはすでに確実性を前提している」(G, 115)というウィトゲンシュタインの省察はこの問題の核心をついている。わたしたちの証拠立ての作業はどこかで終る。また、わたしたちの疑いの行為もどこかで終る。そしてわたしたちの行為はどこかに根拠をもつ。その根拠を証拠立てるわけにはいかない。といってもそれをも疑ってしまうなら、わたしたちはわたしたちの全ての行為が拠るべき基盤を失ってしまうであらう。

〈知〉に関して、わたしたちは〈証拠立ての体系〉において、その根拠を確証する。それとてその作業はどこかで終える。この作業はもともと〈信〉に根差したものであったといえないであらうか。この作業が終えたところで、わたしたちに〈信じる〉ことの世界が開かれてくる。つまり、そこから〈知〉の基礎が問われてくるのである。

わたしたちは誰もこの世に生誕して以来これまで無数の事実を学び、それを信じ、そして受け入れている。子供は大人を信用することによって学ぶ（G, 160）ように、わたしたちも無数の事実の受け入れにさいして、〈信じる〉ことを基礎にしている。まさしく、ウィトゲンシュタインの言うように、「学習とはもとより信じることより始まる」（G, 170）。わたしたちは地理や化学や歴史に属するさまざまな事実を信じる。〈信じる〉ことによって科学を学ぶ。たとえば、〈モンブランの高さを知っているか〉、〈知っているよ、それは学校で習ったよ、4000メートルだよ〉。この場合、〈知っている〉という発言は〈習ったことを根拠にしてそう信じている〉（G, 171）ということの意味している。しかし、〈学校で習ったことをどうして信じるのか〉と聞かれたらどう答えるのであろうか。それに何かを答えたとして。それでも問いが発せられるとすると、わたしたちは答えに窮してしまう。〈証拠を基礎づけ、正当化する営みはどこかで終る〉（G, 204）。〈知〉あるいは〈知っている〉という言葉の用法は多義的である。その実際の適用を枚挙すれば、多義的であるがゆえにわたしたちは混乱に陥いるであろう。ウィトゲンシュタインは〈知っている〉という言葉の用法の多義性に眼をむけながら、〈知っている〉という言葉を〈検証の体系〉に基礎づけたといえよう。したがって、わたしたちが通常〈知っている〉として枚挙する事柄はかれにとって〈知っている〉ことの対象にならないのである。〈私の痛み〉、〈 $2+2=4$ 〉、〈私の存在、大地の存在〉等々がそうである。どれもが誤りえないことなのであり、それゆえ〈確実なこと〉なのである。〈知っている〉ことはその反対のことつまり〈知らない〉こととの関係において成り立つものである。しかし、実際にはわたしたちは〈知らない〉などと言えないものを基礎にして生活している。

わたしたちのジャスティフィケーションはどこかでつきあたる。といってもそこが終点ではない。それがわたしたちの〈疑わず、信じる〉ところの基盤なのである。わたしたちはどこかに〈疑わず、信じる〉ことのできる確固たる基盤をもたざるをえない。だが、わたしたちはそうした〈信念〉をジャスティフィケーションできない。〈真理に根拠があるとすれば、その根拠は真でも偽でもない〉（G, 205）。わたしたちはその根拠を〈信じる〉のである。これこそ〈確実性〉の拠る所であり、ここを拠り所として、わたしたちの諸々の言語ゲームがなされるのである。ムーアの〈私が知っている〉として挙げる命題をめぐるウィトゲンシュタインの省察は、わたしたちの営む行為の拠り所を〈信〉の世界に基礎づけることにあった。^[註2]

〔註1〕 ウィトゲンシュタインは *Glauben* というときに、*Wissen* を信じるということばかりではなく、宗教的信仰とか神のことを考えていたようにもおもわれる。神はまさに *Wissen* の立場からみれば *Groundlessness* である。しかし、神の *Glauben* をめぐるウィトゲンシュタインの *Meditation* については稿を改めたい。

〔註2〕最後に前述した引用文献のほかに、本論作成にあたり利用した参考文献をあげておきたい。また、山本信、大森莊蔵編、『ウィトゲンシュタイン全集』全10巻、大修館、に大変お世話になったことをつけ加えたい。

J. A. Ayer. The Problems of Knowledge, Penguin Books. 1956.

J. Hintikka, Knowledge and Belief, Cornell Univ. Press, 1967.

N. Malcolm, Problems of Mind, Harper&Row, 1971.

H. Putnam, Mind, Language and Reality, Cambridge Univ. Press, 1975.

R. Rhees, Discussions of Wittgenstein, Routledge & Kegan Paul, 1970.

J. R. Searle, Speech Acts, Cambridge Univ. Press, 1969.

B. F. Skinner, About Behaviorism, Alfred A. Knopf, 1974.

(旭川医科大学 哲学)